

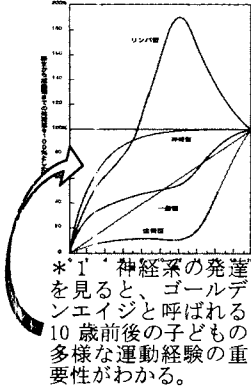
体 育 科

松 田 宏 明 山 下 亜 寿 佳
木 戸 壽 和 子 奥 山 さ や か

1 体育科における知識創造とは

子どもの発達特性

スキヤモンの発達曲線



運動技能

*2 感覚を手がかりとしてその場に適した方法で運動を行う能力。

身体感覚

*3 回転感覚、逆さ感覚、支持感覚等、様々な身体感覚のこと。それによって、身体を動かすことが可能となる。

「気づき」

*4 無意識で行う運動(身体知)を、身体感覚をもとに明らかにし(形式知)言語表現、身体表現で表すこと。「できる・わかる」

運動に対する価値観

*5 個々が運動に対して「よい・望ましい」とする評価判断すること。

児童期は運動神経系の発達がほぼ完成される時期であり、運動技能の習得において効果的な学習を引き出すことができる大切な時期*1である。このような発達特性から見ても、子どもが運動の楽しさや喜びを味わいながら、自らの生活の中に運動を取り入れていくことができるように、教師が働きかけることが重要だと考える。

私たちは、取り上げるそれぞれの運動の特性を活かし、児童期に「運動することは楽しいと実感し、その体験を積み重ねていくこと」を大切にしてきた。ここでいう運動の楽しさとは、「運動技能*2を習得し自己の可能性を求めていく楽しさ＝技能伸長の認知」「友達とふれ合う楽しさ＝友達との好ましい交流」「それぞれの運動の特性にふれる楽しさ＝知的探究心の満足」「心と体が開放される楽しさ＝運動の快適さ」であり、これらが関連し合う中で子どもは「運動を楽しむことよさに気づく」ことができると考える。

子どもがめあてをもち運動に向き合ったとき、これまでに培った身体感覚*3を使って運動を行う。このとき、運動を媒介とした子ども相互、子どもと教師の技術面・心情面で、協力的・効果的に行動する好ましいかかわりを体育的かかわりとし、この体育的かかわりを育むことも体育の学習においては重要であると考え。そして、友達と教え励まし合う中で、身体感覚の「気づき」*4を分かち合うことができる。それを身につけようとしたり、高めていこうとしたりする中で、運動技能を習得し自己の可能性を求めていく楽しさを実感することができる。このような一連の過程で、運動の特性にふれる楽しさや、心と体が開放される楽しさを実感できると考える。

このような学習活動を積み重ねていくことは、運動を楽しむことよさに気づかせ、子どもの運動に対する価値観*5を広げることにつながる。そして、その「気づき」が、生涯にわたって主体的に運動に親しみ、よりよい生活を形成することへの基盤になると考える。

以上のことから、私たちは体育科における「知識創造」を以下のように定義する。

運動を楽しむことよさに気づき 運動に対する価値観が広がり 健康な生活を送るために 自らの生活に運動を活かそうとする営み

2 体育科における「プロセスの自覚」を促す・活かすために

(1) 体育科における「よさ」

子どもが運動と出会い、その運動を行っていく中で、子どもは運動ができる、運動についてわかる、運動で友達とかかわれるということを通して、運動に対する価値観を見出し広げていくことができる。そうすることで、子どもは学習の場だけでなく、生活の場においても運動を取り入れようとし、学習で得た運動技能や身体感覚を広げたり深めたりしていく。このような、子どもが主体的に運動に向き合い、子ども自身が運動に対する「気づき」を実感していくことが体育科における「よさ」であるととらえる。

(2) 「よさ」の共有のための手だて

① 可視化

実態の把握

めあてをもたせる

教師は子どもの実態を十分に把握し、子どもに適しためあてをもたせることが大切である。教師は、子どもに教えるべき学習内容と、子どもに気づかせるべき学習内容を整理し、さらに、学習のねらいに即した支援・評価を明確にする必要がある。その上で学習に臨んだとき、子どもは単元全体の見通しをもち、そこで

時間の保障

学習ノートの活用

の自己の変容を思い描き、自分のめあてをもつことができる。子どもが適しためあてをもつことで、安全に活動ができ、めあてを達成していくことで、自己の変容を認めることができる。教師は子どもに変容を気づかせた上で、運動技能を習得させる時間を保障していくことも大切である。

子どもがめあてをもって学習に臨む中で、子どもの「気づき」や思いを学習ノートに記入し活用することを大切にする。書くことは、子どもが自己に目を向けること、思いを表すこと、「気づき」や「かかわり」について他へ広めることを容易にする。自己に目を向けて、活動を反芻しながら記入された学習ノートには、運動時には出されなかった内容も表れてくる。教師が一人一人の「気づき」をまとめ子どもに返すことは、子どもが必要としていた他の子どもの「気づき」を知ることにつながり、運動への価値観の広がりにもつながる。子どもの思考の流れやできたこと、つかんだコツなどを記入させた学習ノートを活用することは、学び方の習得にも寄与し、学習への意識を高めていくこともできると考える。学習ノートの項目等については、子どもの発達特性を考慮して内容を吟味する。子どもが書くことの必然性をもてるような場を保障しながら活用していく。

視聴覚機器の活用

学習ノートに載せた資料以外に、写真や掛け図、鏡、ビデオカメラ等の視聴覚機器は、行おうとする運動のイメージをつかんだり、技のポイントの確認をしたりする手段となりうる。これらを活用すると、自己の姿や動きの変容を客観的に見ることができる。その際、見る観点や目のつけどころを明確にすることが重要になる。子どもは自分の姿を知り、自分の動きや体の使い方がわかり、目指す姿との違いに気づく。そして、その気づきは、その後の動きや体の使い方の修正に活かされていくことになる。

また、黒板や掲示板、マグネットボードで作戦の検討や動き方の説明を行うことも「気づき」を表現する手助けにもなるであろう。

② 「かかわり」

友達とかかわることのよさを学ぶ

運動技能を身に付けるための体育的かかわりは、運動技能が上達していくように、個に適した場において、友達とかかわることのよさの中で培われていくものと考えられる。

形態の工夫

体育の学習において、子どもの実態に即して活動の場や形態を設定することは子どもが「気づき」を生み出すための重要な要件の1つである。そこで、めあてごとや、適した人数にグループを組織するといった、教師の柔軟な計画性が大切である。グループ学習は、協力的な人間関係の育むことにも寄与する。そのためにも、体育的かかわりを計画的に学習に位置づけることは重要であると考えられる。

達成感
自己有能感

良好な体育的かかわりとして、友達にやって見せたり説明したりすること、真似をしたり・させたりすること、成功したら賞賛すること、失敗しても励まし合ったり、恥ずかしがらずにできること、友達のよい動きを自分の練習に取り入れたり、練習の方向性を指摘し合ったりすること等が考えられる。このような体育的かかわりを育てていくには、友達が自分のことを助けてくれた、認めてくれたという心情的な肯定感を実感させること、運動にかかわる知識(できる・わかる)を得た自分に対して達成感や自己有能感をもたせること、友達からも認められたりすることなどの場をもたせる必要がある。このとき、子ども相互や教師の価値づけが大切になる。このような学習の場を積み重ねることで、一人一人が自分のめあてに対して、集中して運動に取り組むことで「気づき」を生み、運動を楽しむことのよさを実感していくことができると考える。

③ 実践的自覚へのデザイン

教師は子どもの自己の変容(以前の自分と今の自分、めざす自分)に気づかせるよう見る観点を与える。そうすることで、子どもの意識を自己の体へ向けさせることにもなる。このような働きかけは子どもの動きを見る目を養うことにつながり、友達の動きと自分の動き、友達同士の動きを比較し、よい動きや差異を見つけていくことになる。見つけたことを伝え合うことから、「気づき」が生まれ始めるだろう。そうしていくことで、子どもは運動技能や身体感覚が高まり、運動に対する価値観を広げ、生活の中にも運動を活かしていくと考える。

このように体育的かかわりに支えられた授業デザインをすることで、身体感覚からの「気づき」を友達と共有し、プロセスの自覚につなげていくであろう。

3 実践例—2年—

(1) 単元名 ジャンプ！ジャンプ！ジャンプ！（走・跳の運動遊び）

(2) 本単元における知識創造

いろいろな跳び方を友達といっしょに体験する中で 跳ぶタイミングや体の使い方が
分かり 跳ぶことの楽しさを味わう

子どもは鬼遊びやドッジボールなど体を動かして休み時間をすごしていることが多い。ケンパ跳びやゴム跳びのような遊びをしている姿はほとんど見られない。その様子から「走る」や「投げる」動きがある遊びをすることは多いが、「跳ぶ」動きのある遊びに触れる機会が減ってきているように感じる。

運動会の障害走のゴム跳びでは、ゴムの手前で走るスピードを緩めたり、立ち止まって両足で踏み切ったりする姿が見られた。助走からの片足踏み切り、片足着地が難しい様子だった。そこで本単元ではいろいろな跳び方を体験し、体の使い方に注目させることで、跳ぶことの楽しさを味わわせたいと考えた。

まず本単元では、川跳び遊びやゴム跳び遊びをする。いろいろな幅や高さを設定し、今自分ができる跳び方で遊びを楽しむ。子どもは川やゴムを跳び越えたり、友達の跳び方を見たりする中で、いろいろな跳び方があることに気づいていく。その気づきから、もっといろいろな跳び方をしてみたいと感じたり、もっと跳ぶためにはどうしたらいいのか考えたりしていく。そこで手や足の使い方に注目させ、ジャンプのひみつを見つけるようにする。

次にジャンプチャレンジを設定する。ジャンプチャレンジでは1グループ5人のグループに分かれ、8の字ゴム跳び（8の字チャレンジ）と立ち幅跳び（5とびチャレンジ）をする。8の字チャレンジでは、なわとびの8の字跳びのような動きで順番にゴムを跳び越え、30秒間に跳んだ数を数える。5とびチャレンジでは、5人の立ち幅跳びの合計を測る。グループの記録を測ることで競争意欲が高まり、どのように跳べばより記録を伸ばすことができるのか考えながら挑戦していこう。そしてグループで教え合ったり、励まし合ったりすることで、跳ぶことに対する価値観が広められると考える。また、体の使い方に注目させ、その動きを試させることで、跳の運動技能が培われると考える。

(3) 本単元における「プロセスの自覚」を促す・活かすために

① 本単元における「よさ」

友達の跳び方を見たり試したりする中で、記録の伸びが、体の使い方と関係していることに気づく。その「気づき」を自分のジャンプに活かしていくことを本単元における「よさ」ととらえる。

② 「よさ」の共有のための手だて

ア 可視化

ジャンプチャレンジではグループごとのジャンプ記録カードと、一人一人のジャンプ記録カード（約2mの紙に自分の立ち幅跳びの記録が分かるように印をつける）を持つことで、記録の伸びに気づくようにする。記録に挑戦すると、記録カードで以前の記録とすぐにくらべることができるので、記録を伸ばすためのめあてが明確になる。何回もチャレンジさせるのではなく、体の使い方について注目させることで、より遠くへ跳ぶための「ひみつ」を見つけていく。見つけたことを全体に紹介し、その「ひみつ」を試す時間を保障する。そうすることで、今までの自分の跳び方との違いを体感させたい。

授業のふり返りでは学習ノートを活用する。学習ノートにジャンプの気づきを書くことで、自己に目を向けることができる。授業で気づけなかったことも学習ノートに書くこともできる。その気づきは付箋紙に書いて掲示し全体に広めることで、次のチャレンジに活かせるようにしたい。

イ 「かかわり」

ジャンプチャレンジでは5人グループで活動する。5人が協力して記録に挑戦したり、より記録を伸ばそうと体の使い方について話し合ったりする中で、ジャンプの「ひみつ」を見つけていこう。その「ひみつ」を活かしたジャンプを試し、自分の記録が伸びたり、リズムよく跳んだりすることで、跳ぶことに対する達成感や自己有能感を味わうことができるだろう。また、ジャンプチャレンジを通して、今まで気づけなかったことに気づいたりして、友達とかかわりながら学ぶことのよさを実感すると考える。

ウ 実践的自覚へのデザイン

跳ぶ運動遊びではいろいろな跳び方を繰り返し行い、高く跳ぶ、遠くへ跳ぶ、続けてリズムカルに跳ぶために必要な体の使い方注目させていく。そうすることで、友達の跳び方と自分の跳び方をくらべたり、違いを感じたりして、体の使い方を見る目を養うことにつながる。今後の運動遊びにおいても、体の使い方注目させて運動に取り組んでいく手がかかりになると考える。また、走・跳の運動（高跳び・幅跳び・ハードル走）の基礎となる運動技能を身につけることにもつながると考える。

(4) 単元計画（総時数5時限）

主な活動と内容	「よさ」の共有に関する手だてと意図
<p>1 川跳び遊び・ゴム跳び遊びをする 〈ジャンプ発明！いろいろなジャンプで跳び越えよう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・走って 勢いをつけて跳んでみよう ・手足を大きく広げて大の字ジャンプをしよう ・ケンケンジャンプ（片足踏み切り・片足着地）をしてみよう 着地が難しいな ・かえるジャンプで跳び越えてみよう ・もっと遠くに跳んでみたいな ・もっと高く跳んでみたいな 	<p>可視化 「かかわり」</p> <p>川の幅やゴムの高さをいろいろ設定し、どんなジャンプで川やゴムを跳び越えられるのか踏み切りや着地を意識させながら跳ぶ活動を行う。踏み切りや着地を意識させることで、いろいろな跳び方があることに気づかせる。その際、気づいた跳び方に名前を付けたり、友達の跳び方を試したりして、跳ぶことに対するイメージを広げたい。</p>
<p>2 グループでジャンプチャレンジをする 〈ジャンプチャレンジをしよう〉</p> <p>（8の字チャレンジ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・片足で踏みきってジャンプしよう ・友達との間をあけないで次々にジャンプしたら数が増えそうだよ ・間をつめすぎたら跳びにくいな ・高さを変えて50回をこえるようにしよう <p>（5とびチャレンジ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手を大きくふったほうが跳びやすいよ ・手をふって ひざをまげてジャンプすると遠くへ跳べるよ ・踏みきりの前に手をふったら勢いがつくよ 	<p>可視化</p> <p>ジャンプ記録カードに記録を記入することで記録の伸びが分かるようにする。その際、記録の伸びにつながったと考えられる体の使い方も書くことで、体の使い方を意識しながらジャンプチャレンジをするようにしていきたい。</p> <p>「かかわり」 実践的自覚へのデザイン</p> <p>跳び出すタイミングや体の使い方をつかませるために全体でジャンプの「ひみつ」を紹介し、グループでその「ひみつ」を試す時間を保障する。試す時間を保障することで、「ひみつ」を体感することができ、新たな「ひみつ」を見つけることにもつながりたい。</p>
<p>3 ジャンプチャレンジ大会をする 〈ジャンプの「ひみつ」を使って 記録を伸ばそう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8の字チャレンジ 5とびチャレンジで最高記録を出したいな ・今までよりも記録がいっぱい伸びてうれしいな ・「ひみつ」を使ったら 最高記録が出たよ 	<p>実践的自覚へのデザイン</p> <p>他のグループのチャレンジの記録を測ることで、他のグループの跳び方に目を向けさせ、記録の伸びを賞賛し合うようにする。そうすることで体育的かかわりを育む場となるだろう。</p>

(5) 本単元における授業の実際と考察

体育科における「よさ」を共有するための手だてが、めざす知識創造の充実を促したかどうかについて本実践を考察する。

その方法として、本単元の第4時（以下本時とする）の子どもの様子や記録、学習ノートを中心にして考察する。

① 本時を中心とした授業の実際と手だて

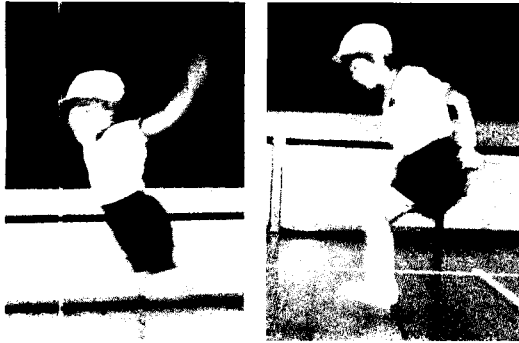


写真1 単元導入時のジャンプ



写真2 腕を振り上げる

写真3 腕を振り下げる

- C：声に合わせて手を振ると、ひざがリズムにのって動いていた。
- C：友達のジャンプを見ていたら、ひざを曲げて跳んでいました。
- T：もし、声もひざも使わなかったら遠くへ跳べるかな。
- C：跳べないよ。
- C：跳べるかどうか、何も使わないジャンプをやってみよう。
- T：声も手もひざも使わないで跳んでみましょう。
- C：（試してみる）
- C：手も声もひざも使わないと、少ししか跳べない。
- C：何も使わないと跳べないから、手も声もひざも必要です。
- T：知らないうちに、ひざも使って跳んでいたんだね。友達に自分のジャンプを見てもらいましょう。

資料1 ひざの動きについての話し合い

ア 可視化

立ち幅跳びは、踏み切り時の脚の伸展と腕の振り込みのタイミングの一致、空中でのフォームのまとまり、着地動作の一連の動作で構成される。

単元導入時に上記のような跳躍動作がほぼできている子どもはクラスの3分の1だった。跳躍動作が十分でない子どもは、跳躍中のバランスを保持するために腕を用いたり、身体の屈曲や伸展が少なかったりしていた（写真1）。

そこで、本時では腕の振り込みとひざの使い方に焦点を当てることにした。グループ内でジャンプを見合い、体の使い方について話し合うことで「気づき」が生まれ、その「気づき」を試させることでジャンプに変容が見られると考えた。

・体の使い方を意識させる

まず、その場で腕を前後に振り、腕を振ることを意識させた。それは、腕の振り込みが十分でなかったためである。

グループに分かれて練習に入ると、腕はしっかり前後に振っているが、踏み切り時の腕の振り込み方に違いが見られた。写真2は腕を振り上げると同時に踏み切っている。写真3は腕を振り下ろすと同時に踏み切っている。写真2のように腕を振り上げて踏み切ると脚の伸展が見られ、記録が伸びにつながる。しかし、写真3のように腕を振り下ろすと脚の伸展がなく、跳躍に勢いがつかない。

写真3のような跳び方をしている子どもが、腕の振り上げと同時に踏み切りができるように、声を出してリズムをとらせることにした。リズムをとっているグループを全体の前で紹介した。

『いち にの さん』の声に合わせて、腕を前後にリズムよく振り、腕を振り上げると同時に踏み切れることを全体で確認し、グループに分かれて試させた。すると、腕の振りが大きくなり、振り上げと同時に踏み切るタイミングがとれるようになってきた。グループごとにタイミングが取りやすいかけ声も考えていた。

声を出して跳び出すタイミングをとっていると、ひざでリズムをとって跳んでいることに一つのグループが気づいた。その「気づき」を広めるために、そのグループ中心に全体を集めた。そして、グループの一人に試技をさせ、踏み切り時のひざの動きについて話し合った（資料1）。

子どもが試技を見たり話し合ったりする中で、ひざの使い方について理解していたようだった。よりひざの使い方の重要性を理解させるために、ひざも腕の振りも使わないジャンプを体感させた。

子どもは今まで見つけてきたジャンプの「ひみつ」を使わずに跳んでみた。今までのように跳べないことを子どもは体感することができた。言葉だけでなく試してみることで、体の使い方の理解を深められたようだった。

ひざのまげ方もジャンプの大切な「ひみつ」だと分かった子どもは、グループごとにひざの使い方を意識して跳ぶ練習をしていた。ひざの使い方が分かると、他の体の使い方にも視点が向くようになった。

このように、体の使い方に焦点を当て、グループに分かれて試す時間を保障したことは、一人一人のジャンプの変容につながったととらえられる（資料2）。

・記録カードの活用

立ち幅跳びの記録を一人一人が残していけるようにジャンプ記録カードを持たせた。着地した位置に印をつけさせ、着地と同時に記録の伸びが分かるようにした。

子どもは自分の最高記録をめざして意欲的に跳んでいた。最高記録の印が目で確かめられることで、視線を前へ向けて跳ぶことができ、無意識のうちに体を前傾して跳べるようにもなっていた。

記録カードには、ジャンプの「ひみつ」も書くようにした。子どもは「手を大きく振って跳ぶ」や「しっかりひざをまげてから跳ぶ」などカードに書き込んでいた。跳ぶ前にその「ひみつ」を目にしてから跳ぶことができるので、ただ跳ぶ回数を重ねるのではなく、常に体の使い方を意識して跳んでいた。

一人一人に記録カードを持たせたことで、より遠くへ跳ぶためのめあてを明確にもつことができ、手だてとして有効であったと考える。

イ 「かかわり」

・5とびチャレンジで体育的かかわりを育む

5とびチャレンジでは一人の記録の伸びがグループの記録の伸びにつながる。そのため、より遠くへ跳べるような跳び方についてグループで考えを出し合うことになる。グループで話し合ったり、全体で確認したりしたことをグループにもどって試すことで、互いのジャンプを見合うようになり体育的かかわりが育まれると考えた。

抽出児Aは手の振りを意識して跳ぶ練習をしていた。全体でひざのまげ方について確認した後、A児はグループにもどり試してみた。ひざをまげることは分かっているが、どのくらいまげればいいのか分からない様子だった。そのため、ひざをまげるのがより遠くへ跳ぶための「ひみつ」になるのか疑問に感じている様子だった。A児はその疑問を同じグループのB児に話した。B児は言葉とジャンプを使ってA児に説明した（資料3 写真5）。B児はひざのまげの大きさを変えて跳び方の違いを示し、ひざをまげることの必要性を伝えていた。そのジャンプを真似して、A児は繰り返し練習をした。そうするとA児の記録が伸び、友達から認められ、A児は達成感を持つことができた。また、B児はA児や

わたしは、きょういつもより手を大きくふったら、とおくまでとべたのでうれしかったです。とぶ前に手を大きくふって、前に手がきたときにとんだらとおくまでとべました。

わたしは、とおくにとぶ「ひみつ」を見つけてきました。それは、「手をふって、ひざをぎゅっとまげて、前に体じゅうをかけて、思いっきりとぶ」というひみつです。それをつかうとよくとべました。

資料2 学習ノートより



写真4 記録カードを使つてのジャンプ

A児：しゃがんで跳ぶの？

B児：立って跳ぶんだよ。

(ひざをまげて跳んで見せる)

A児：ひざを少しまげて跳ぶんだね

B児：しゃがんだらここまでで、しゃがまなかったらここまで。

(二つのジャンプをくらべながら説明する)



資料3 ひざのまげ方について
跳びながらの説明

写真5 言葉とジャンプによる説明

グループのメンバーに説明できたことを認められ自己有能感を持つことができたといえる。

しかし、5人グループだったことが本時の活動に適した人数であったかどうか課題が残る。ほとんどのグループがグループ内で2人と3人に分かれて活動していたのである。本時の子どもの様子や学習ノート(資料4)からも、グループで見合うよりも、特定の子どもから教えてもらったことが自分の跳び方の変容につながったようである。また、4人で1人の跳び方を見ると、見る時間が長くなり、運動技能を習得させる時間を保障していたとはいえない。そのことから、活動に適した人数でグループを組織する必要があったといえる。

ウ 実践的自覚へのデザイン

本時では体の使い方に注目させたことで、以下の5点がジャンプの「ひみつ」として共有された。

- ・声を出してリズムをとる
- ・腕を前後に振って、腕が前にきたときに踏み切る
- ・ひざをまげて踏み切る
- ・高く跳ぶことも考えて跳ぶ
- ・前に体重をかけて跳び出す

ただ記録に挑戦するだけでなく、教師が「どこに気をつけて跳んだの？」と聞くことで、体の使い方を意識して跳ぶことができたといえる。資料5からも体の使い方を意識して跳んでいたことが分かる。また、資料5の下線部からは自分の跳び方と友達の跳び方をくらべながら活動していたことも分かる。それは友達の体の使い方を見る目が養われたことにつながったといえる。

C児はグループでの発言は少ないが、友達の跳び方をよく見て学習に取り組んでいた。友達の跳び方からの「気づき」を自分のジャ

わたしは、今日ジャンプをして、〇〇さんにアドバイスをもらいました。どんなアドバイスかというと、足をまげて手を思いっきりふるととおくまでとべるよとアドバイスです。そうしたら、前よりじょうずにとべたので、うれしかったです。

資料4 学習ノートより

C児：きょう、ジャンプジャンプジャンプでいろいろポイントができました。それは、さいしょは手を大きくふるとでました。それに、ぼくはリズムにのってひざをまげるのをついたりしました。友だちはこしもまげていて、すごかったです。

D児：きょう、5とびをして、ひざとかこしとかじぶんがわからなかったこつがでてきて、ジャンプ記ろくカードの記ろくがすこしのびました。それは、みんなのこつを聞いて、「おっ、これはいいな」と思ったのをやってみたからです。みんなのこつをあわせてなにかいいこつができないかと思えます。あしたは体いくがなけれど、それだけ考えるじかんがふえます。つぎの体いくのじかんまでにいい考えが思いつくといいです。

E児：わたしは、きょうの体いくのときジャンプをして、とんだところを見ると「なんだ、こんだけしかとんでないじゃん」と思って、みんなのジャンプをよく見ようと思って見てみると、いっぱいとんでいる人は足をまげていて、手もいっぱいふっていました。なので、じぶんのとくらべてみました。あれ？わたし足をまげてないとわかったのでよかったです。

資料5 学習ノートより

ンプに活かしていた。

D児は体を動かすことが苦手であるが、本單元においては記録の伸びを楽しみにし、学習に取り組んでいた。記録を伸ばすことに興味を持っていたので、自分でいいと思うことは進んで試していた。記録カードで記録の伸びが分かるので、その伸びがグループで認められ、よりよいかかわりが生まれた。

E児は、体の使い方を意識せずに自分の思いのままに跳んでいた。しかし、記録が思うように伸びず、友達の跳び方を見ることを促した。記録カードで自分より記録がよい友達の跳び方に目を向け、体の使い方に注目するようになった。手の振り方やひざの使い方が分かり、自分の跳び方に活かすようになった。

このように、子どもは友達の動きを見る目を養い、「気づき」を活かしていくことにつながったといえる。しかし、本時で分かった「ひみつ」を一度に試そうとするとジャンプのバランスをくずし、記録が伸びずに考え込む姿も見られた。そのため、教師が子どもに気をつけるべき観点を明確に示し、一つずつ試していくように促す必要があったといえる。

(6) 単元を終えて

体育科における「よさ」は、子どもが主体的に運動に向き合い、子ども自身が運動に対する「気づき」を実感していくことととらえている。

本時では、子どもがめあてをもって主体的にジャンプと向き合えるように手だてを講じた。子どもはより遠くへ跳ぼうとして体の使い方を工夫していた。本時のふりかえりの「はじめはジャンプの遊びをしていたけど、みんなと勉強していたら手の振りやひざをまげることが分かって、遠くに跳べるようになった」の発言からも意欲的に取り組んでいたことが分かる。

これまでの考察から、本單元において体育科理論で掲げた手だては、有効に働いていたといえる。特に有効であった手だては、単元を通して体の使い方に注目させたことである。友達の跳び方を見る目が養われ、よい体の使い方や友達の跳び方との差異の「気づき」が多く生まれた。概ね知識創造の充実を促したのではないかと考えられる。

しかし、課題として3点考えられる。

まず1点目として、視聴覚機器の有効な活用の仕方についてである。子どもの跳んでいる姿をビデオカメラや写真で示すことで、運動のイメージをより明確につかむことができたのではないかと考える。自分のジャンプの変容も分かりやすくなる。

2点目として、ジャンプの「ひみつ」としてジャンプでの「気づき」を付箋紙に書いて掲示をしたことである。その掲示(写真6)は付箋紙を貼ることに意識が向いてしまい、ジャンプに活かすことができなかつたようだ。「気づき」が全体に広がるように有効な掲示について考える必要があった。

3点目として、学習に応じた形態の工夫である。単元を通して5人グループで活動した。8の字チャレンジ(写真7)では、運動量の確保やリズムカルに跳び越えることができ5人グループは有効であった。しかし、5とびチャレンジでは運動量が確保されず、5人で活動することのよさがあまり見られなかつた。適切な人数や形態の工夫を探っていく必要がある。

本単元の実践を通じて得た成果と課題を活かし、知識創造を充実させていく学習になるように今後も取り組んでいきたい。

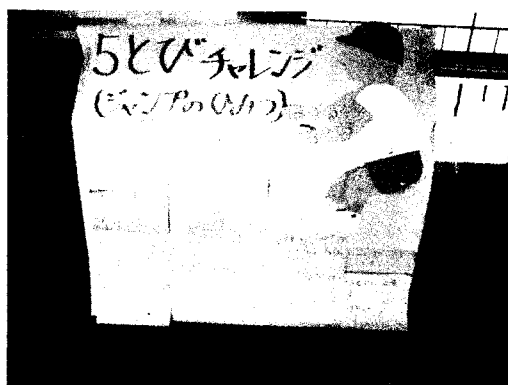


写真6 ジャンプのひみつについての掲示

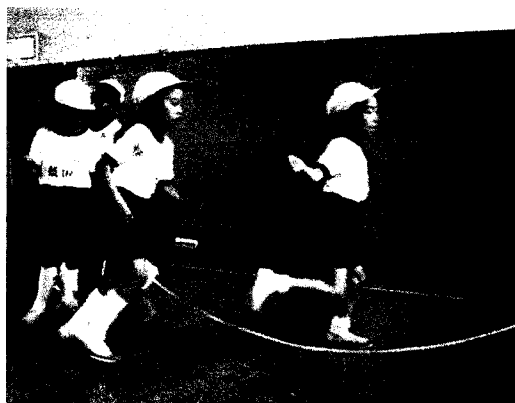


写真7 8の字チャレンジの様子

保 健

木 戸 壽和子 松 田 宏 明
山 下 亜寿佳 奥 山 さやか

1 保健における知識創造とは

知識創造の定義

「からだの声」
生命活動及び生命活動に伴う諸々の現象
保健行動
自分の命や健康を守るための行動

保健認識

健康の保持増進に向けて実践が伴うまで深く理解すること。

自分に関係づける
自分との関係を意識すること

子どもが自分の命や健康を守るために自ら行動しようとするのは自分の命やからだに危険が及ぶ恐れを感知したときや、自分の具体的な取り組み（行動の必要性）を理解したときである。そこで、一時も休まずに生命活動を続け、自分の命と生活を支えているからだ（心と身体）に視点を当てて、保健（保健学習・保健指導）における知識創造を次のように定義した。

「からだの声」を実感できる活動を通して 自分の命や健康な生活を支えているからだの意義に気づくことで 保健に対する価値観が広がり自らの保健行動につなげていこうとする営み

「からだの声」とは、からだにある巧みな作りや働きを使っでの生命活動および生命活動から生じる諸々の現象である。「からだの声」を実感するとは、日々の生活では意識することがほとんどない生命活動について体験活動を通して感知し、その意味や役割を理解することである。からだの意義に気づくとは、自分の命や生活に関係づけることで、自分にとっての有用性や健康なからだの大切さに気づくことである。保健に対する価値観が広がり自らの保健行動につなげるとは、自分の命や健康を守る必要性を自覚し、保健認識までに理解を高めることである。

知識創造における理解の過程を子どもの姿で言うと以下のようなになる。子どもは、「からだの声」を実感できる体験活動を通して、自分の「からだの声」について自分なりの考えをもつ。「からだの声」は個々の見方・感じ方によってその考え方に差異が出やすいので、友達とそれぞれが実感したことやとらえたことを交流したくなる。交流を通して「からだの声」についての理解が広がり深まったりしていく。しかし、「からだの声」を理解するだけでは、からだの作りや働きのすばらしさは理解できても、実践につなげるまで深く理解したとはいえない。そこで、「からだの声」を自分に関係づけて見つめなおすことで、命や健康な生活を支えている自分のからだの意義に気づく。からだの意義に気づいた子どもは、からだの有用性や健康であることの大切さに気づくとともに、保健に対する価値観が広がり、自分の命やからだを守る保健行動につなげていくであろう。また、自分のからだについて理解を深めていく過程で、自己肯定感を育てていくことも期待する。

2 「プロセスの自覚化」を促す・活かすために

(1) 保健における「よさ」

保健の「よさ」は、「からだの声」を実感するという学びと、からだの意義に気づくことで保健に対する価値観が広がっていくという一連の思考とその学び方である。「からだの声」を実感する学びとは、体験活動を通して生命活動および生命活動から生じる諸々の現象を実感しその意味や役割を理解していくことである。からだの意義の気づきから保健に対する価値観が広がる学びとは、自分に関係づけながら学ぶことでからだの有用性や健康の大切さに気づき、自分の命やからだを大切にしようとする保健認識に至るまで理解を深めていくことである。すなわち、子どもが主体的に自分の体に向き合い、「からだの声」の実感と自分に関係づける学びを通して保健認識を構築していくことである。

(2) 「よさ」を共有するための手だて

保健では、「からだの声」を実感する場と、からだの意義の気づきから保健に対する価値観が広がる場に重点を置いて「よさ」の共有を追求する。その際、子どもに何に気づかせるのか、そのためにどのような学び方が必要かを考えて授業設計する。

① 可視化

比較する活動から

「からだの声」を実感する場では、体験活動を通して「からだの声」を実感していく学び方と、個々がとらえた実感を仲間と比較することで生命活動の意味や役割の理解が広がることを目指している。そこでの体験活動は、誰もが意欲的に取り組めること、発達特性に応じたこと、楽しみながら理解を深められることとする。比較する方法は、言語表現によるものだけでなく、やってみたり、試したり見比べたりするなど、非言語によって感じていくものもある。

自分に関係づける活動から

からだの意義の気づきから保健に対する価値観が広がる場では、「からだの声」を自分に関係づける活動によって、子どもは自分にとっての有用性や健康の大切さに気づき、保健に対する価値観を広げ実践につなげていく。ここでは、からだの意義について自分なりの考えを持てること、多様な考えに出会えること、それらの出会いの中から自分なりに納得できるものを判断選択できることなど、子どもの主体的かかわりが生まれることが重要である。

ワークシートで思考をつなぐ

「よさ」を共有するには、思ったことや気づいたことを子ども自身が言葉や動作、絵や図などで表現する必要がある。そこで、認知の様子を時系列で記録したり、自分自身の考えや気づきに友達の考えを追加したり、何をどのように学んできたかをふり返ることができるようにワークシートを活用する。子どもはこれらの記録をふり返りながら「からだの声」の実感やからだの意義の気づきを保健に対する価値観の変容につなげていくであろう。そのために、わかったことや考えたことを随時ワークシートに記録する場と学習の最後に自分の記述をもとに自分の思考のプロセスをふり返る場の確保が必要である。

② 「かかわり」

交流活動を取り入れる

「よさ」の共有を図るために「からだの声」を実感する場面では、生命活動の意味や役割について理解が広がるように、自分が実感したことの発表や比べ合いなどの交流活動を取り入れる。また、からだの意義の気づきから保健に対する価値観が広がる場面では、からだの有用性や健康の大切さに気づいたり、自分の命や健康を守る必要性を自覚できるように話し合いや意見交換などの交流活動を取り入れる。交流活動を設定する際は、同質なものと異質なものとに出合わせることで、子どもに自分の認識との類似点や相違点を気づかせ、かかわりが活性化していくようにする。これらの交流活動を「よさ」の共有に有効に機能させるには、交流活動の目的を明確に示すこと、自分なりの考えを持つ時間を保障すること、ワークシートに自分の考えを記録させることを重視する。また、交流活動の前提条件として、個々の感じ方考え方が尊重され、安心して自分の考えを表出できる環境作りにも配慮する。

③ 実践的自覚へのデザイン

学習内容の調整と日常生活につなぐ

実践的自覚とは、保健に対する価値観が広がったことで、子どもが自分のからだを守ることの必要性を理解し、主体的に保健行動につなげていこうとすることである。なお、これらは単元の中ですぐに現れるものではなく、子どもの日常生活やその後の保健学習および家庭科など他教科の学習につながっていくものと期待する。そこで、単元計画を立てる際には、保健学習と保健指導の関連、他教科への発展を考えて、学習内容を調整する。また、子どもの生活では、日常の様々な機会を通してからだの声やからだの意義を意識させていく。

3 実践例 — 2年—

(1) 単元名 「成長の声」を聴こう

(2) 本単元における知識創造

自分の心や体が大きく変わってきていることを実感できる活動を通して 自分が確かに成長していることやこれからも成長し続けることの大切さに気づき 自分の成長に主体的に関わろうとする

子ども時代は、心も体も成長という変化を続けている。心の面では、思考・判断力とともに、発達段階に応じた社会のルールや人とのかかわり方などを身につけ、将来の自立に向けて様々な成長が起きている。体の面では、大きさの変化とともに、いろいろな身体機能も同時に発達している。しかし、子どもが自分の発育や発達を自ら自覚することは少なく、いつの間にか大きくなっていったという程度のとらえ方をしている子が多い。

そこで、乳児期・幼児期・児童期・成人という大きな区分で心と体の変化を見つめさせることで、子どもが自分の成長を自覚し、自分の成長に主体的に関わっていけることを願ってこの単元を設計した。

本単元では、成長という生命活動を「成長の声」、自分が確かに成長していることやこれからも成長し続けることの大切さに気づくことを「成長の意義に気づく」、成長に主体的に関わろうとするを「保健認識に至ること」と位置づけて、単元構成し知識創造の充実をめざす。

まず、自分自身の成長しているところを探す「成長のマップ作り」の学習によって、子どもは自分自身の成長したところを把握するとともに自分の成長に関心を持ち始める。つぎに、誕生時の足型と現在の自分の足型を比べたり、幼児期に使っていた靴と現在使っている靴を比べたりする「体くらべ」の学習によって、成長に伴う体の変化を実感し、自分の体が確かに成長していることに気づく。また、大人の人型と自分を比較する活動によって、自分が成長・発育の途中であると理解するとともに、今後も成長し続けることの必要性を自覚し、成長を守るための保健行動につながであろう。続いての0歳1歳3歳の泣き声を聞き比べる「泣き声くらべ」の学習によって、子どもは泣き声の変化と心の成長の関係を理解し、自分の心もまた成長していると気づく。泣き声の変化を聴き取る活動では、年齢によって泣き声の変化することを理解する。泣いている訳を予想する活動では、泣くことが自分の気持ちや欲求の表現だったり、かかわりの手段だったりすることを理解する。また、むやみに泣かなくなっている現在の自分をふり返ることで、自分の心が成長していることに気づくとともに、今後も成長していく必要性を自覚する。

このような活動を通して、子どもが自分の成長を実感し、これからも成長し続けることの大切さに気づくならば、睡眠や運動、食事など自分の生活の仕方や心のあり方について見直すことになるであろう。その結果、自分の成長に主体的に関わっていくにちがいない。

(3) 本単元における「プロセスの自覚」を促す・活かすために

① 本単元における「よさ」

本単元の「よさ」は、成長に伴う体と心の変化を実感できること、自分との関係を意識することを通して自分の成長を確信することやこれからも成長し続けることの大切さに気づくこと、これらを一連の流れとして理解し自分の成長に主体的に関わろうとすることである。

② 「よさ」の共有のための手だて

A 可視化

「よさ」を共有させるための可視化の手だては、次の3点に重点をおいて取り組む。

- ・一点目は比較する活動を取り入れること
- ・二点目は自分との関係を意識する活動を設けること
- ・三点目はワークシートの活用で思考をつなぎ一連の流れとして理解させること

一点目の比較する活動では、乳児の手型・足型と今の自分の手型・足型を比べる体験活動や自分と乳児や大人の人型で体の大きさを比べる体験活動によって体の変化したことを実感させる。また、生後まもない乳児と1歳児と3歳児の泣き声の違いを聞き比べる体験活動で、成長による心の変化を実感させていく。

二つ目の自分との関係を意識させるために、自分の成長したところを探す“成長のマップ作り”の活動を設定した。三つ目のワークシートの活用では、その都度学んだことや理解したことをワークシートに記録し、それをふり返ることで、自分の成長の実感から成長の大切さの気づきに、そして成長への主体的かかわりまでを一連の流れにして、思考を連続させていく。また、成長を自分のことととらえ肯定的に受け止められるように、課外活動で自分の成長について家族にインタビューをさせる。その際は健や

かな成長を願う家族の思いも自覚できるように、使うワークシートを工夫する。

イ 「かかわり」

成長についての学習は、個人差の問題や自覚の難しさがあるので、自分だけでは思考が広がりにくい。そこで、「成長の声」を実感し、その意義に気づく場面では、友達との交流活動を取り入れ、よさの共有を図っていく。その交流活動では言語以外に、比べ合ったり、見合ったりなどの非言語による「かかわり」も取り入れる。「成長のマップづくり」と「大ききくらべ」の学習では、グループで相談や共同作業をしながら自分の体が大きくなっていることを実感できる活動を設定する。

「泣き声くらべ」の学習では、泣き声の変化から心の成長に気づかせるために、泣き声の聞き比べや泣いている理由を予想する交流活動を取り入れる。

ウ 実践的自覚へのデザイン

これまで無意識にとらえてきた自分の成長についての理解が、この学びによって、自分の成長に主体的に関わろうとするまで理解され、子どもの保健認識になることを期待して実践を進める。さらに、ここで学んだことが2学期の生活科の「マイヒストリー」という単元や、今後の保健学習や日常生活につながり、スキーマとして活用・応用されることを期待する。そこで、単元計画を立てる際は他教科の学習内容や日常の生活とのつながりを考えて設計する。

(4) 単元計画（総時数3時間＋課外活動）

主な活動と内容	よさの共有に関する手だてと意図
<p>1 <成長マップを作ろう></p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の成長した所をワークシートに書き入れよう 背がのびたよ 手が大きくなったよ 足も大きくなったよ 話ができたり 歌が歌えたりする ご飯を自分で食べられるよ 友達に優しくできるようになった 本が読めるし 字も書ける 友達はどんな成長マップ作っているのだろう 友達と同じものもあるけど違うものもあったよ 友達の話聞いてみたらもっと見つけられた 心の成長は見えなくてわかりにくいなあ 成長とは 体が大きくなること 心が変わること できることが増えることだったよ 	<p>可視化</p> <p>まず、自分のどこがどのように成長したかをワークシートに書かせる。次に、それを付箋に写し黒板の拡大マップに貼らせることで、からだのいろいろなところが成長していると実感させる。</p> <p>また、貼られた付箋の分類によって、成長は体と心とその他に大別できると気づかせる。</p> <p>「かかわり」</p> <p>個のとらえが全体に広がるように、グループで自分の成長マップを見せ合ったり相談したりする交流活動を設ける。また、個が見つけたことを拡大マップに分類しながら貼っていく活動によって友達との共通点と相違点を視覚的に理解させる。</p>
<p>2 <確かめよう 体くらべから></p> <ul style="list-style-type: none"> 足型と手型と人型で大きさを比べてみよう 赤ちゃんの足型と比べたら ずいぶん大きいなあ 赤ちゃんの時はずいぶん小さかったんだなあ 体くらべをしたら 自分はとても大きくなった 赤ちゃんの靴と自分の靴を比べたらたいへん違ったよ 洋服もとても小さいよ 本当に着てたのかな 大人の足型 手型 人型と比べたら まだ小さかったから自分たちはもっと大きくなるんだろうな 比べてみたら 僕たちは本当に成長してたよ これからもっと成長して大きくなりたいなあ 成長の仕方は一人一人違うよ 	<p>可視化・「かかわり」</p> <p>自分の体の変化を実感させるために、手型や足型や人型を使って、赤ん坊の頃と今の自分、今の自分と大人を比較する体験活動を設定する。</p> <p>成長に伴う体の変化を実感させ、からだの変化を成長の変化へと思考転換させるために、追体験の場ではグループで自由に交流させながらワークシートに記録させる。</p> <p>可視化</p> <p>手型や足型などを年齢順に黒板に掲示するなどの板書を工夫したり追体験コーナーを設置したりして、成長についての自分との関係を意識させる。</p>
<p>3 <泣き声くらべから心の成長を見つけよう></p> <ul style="list-style-type: none"> 生まれた時は弱々しい声だ なんていっているの。おっぱいがほしいのかな おむつかな 1歳の赤ちゃんは少し違うよ なぜ泣いているのだろう おこっているのかな おなかがすいたのかな おむつを替えてほしいのかな 同じ3か月なのに前と後で少し違っているよ 哀しそうだな かわいそう 1歳の赤ちゃん 元気がないけど 眠いのかな お母さんをさがしてるように聞こえるよ 幼稚園の子はなんか言いながら泣いてるけど けんかしたのかな 遊んでほしいのかな 泣くことが変わるの心が大きくなったから これからも自分の体と心を大きくしたいなあ もっと成長について考えてみようかな 	<p>可視化</p> <p>泣き声の変化と泣いている理由を感じ取らせて、それをワークシートに記述させたり話し合わせることで、泣き声の中にその子の思いや意志や感情など心の働きと発達に伴う変化があると気づかせる。</p> <p>「かかわり」</p> <p>グループでの相談活動や全体での話し合い活動を通して、自分と異なる考えに出会い、泣き声や心の成長に対する新たな理解が広がるようにする。</p> <p>実践的自覚へのデザイン</p> <p>未来の自分との比較から、成長途上の自分を意識させることで、今後も成長し続けることの大切さを自覚し、成長という視点で自分の生活や行動を見直すきっかけにする。</p>

(5) 本單元における授業の実際と考察

① 本單元における「よさ」

本単元の「よさ」は、成長に伴う体と心の変化を実感できること、自分との関係を意識することによって自分の成長を確信することやこれからも成長し続けることの大切さに気づくこと、これらを一連の流れとして理解し自分の成長に主体的に関わろうとすることである。

子どもが、本単元の「よさ」を共有し、成長という生命活動を実感し、自分の成長の維持・増進に向けて何をなすべきかを認識していくためには、可視化、「かかわり」、実践的自覚のデザインの手だてが有効であったかどうかを、実際の授業における子どもの姿や子どもの記録から考察していく。

② よさの共有のための手だて

ア 可視化

・比較する活動を取り入れる

比較する活動は、乳時の手型（てがた）・足型（あしがた）と今の自分の手型・足型を比べたり、自分と乳児と大人の人型（ひとがた）を比べたりする体験活動によって体に変化したことを実感させることである。また、生後まもない乳児と1歳児と3歳児の泣き声の違いを聞き比べる体験活動によって、心の変化を実感させていくことである。このことは、2時間目の体くらべの学習と3時間目の泣き声くらべの学習を中心に考察する。

乳児との手型・足型くらべ（写真1）では、誕生時の足型のあまりの小ささに驚き、多くの子どもは体の大きさの変化を実感するとともに自分たちが確かに成長していることを理解することができた。なお、この活動で提供した比較用の手型足型は、自分のものに重ねると見えなくなったので、型をくりぬきラミネートしたものにすればよかったと反省した。

続いての人型くらべの活動（写真2）では、自分の体が成長していることやこれからも成長し続けることの大切さに気づかせるために、大きな模造紙に大人、自分たち、乳児の三つの人型を重ねて書き入れ、その大きさの違いを比べさせた。大人の人型を見た時、「大きい 誰だろう」「きっと一番背の高い〇〇先生だよ」とあちこちからつぶやきが聞こえてきたので、「自分たちと比べたらどれくらいか」と問いかけた。多くの子は大人の半分ぐらいだろうと予想したので、大人の人型の上に平均的身長の子どもの人型をとって見せた。子どもからは「おー」「えっ大きい」という驚きの声が上がった。それは、予想に反して自分たちがこんなに成長していたと実感した瞬間だった。続いて、新生児の人型を人型に並べて見せた時にも子どもから「えっ小さい」「こんなにちいさいの」などと驚きの声が出た。

これらの活動は、子どもの心に、意外だという揺れをおこし、自分たちの体がこんなに成長していると自覚させるには大変有効だった。この活動の後、子どもが作ったかるた文を資料1で紹介する。

「泣き声くらべ」では、泣き声の変化と泣いている理由を感じ取る活動を通して、泣き声の中にその子の思いや意志や感情など心の働きがあること、泣き声が変化したのは心の成長の証であること、泣くことが少なくなっている自分たちはさらに心が成長していることだと気づかせたい。そこで、0歳1歳3歳の泣き声を聞き比べる活動と泣いてい



写真1 手型・足形くらべ



写真2 人型くらべ

大きい人 小さい人よりも 手足大きい
体がね 前より大きくなっている
赤ちゃんは 足がた手がたが 小さいな
ぼくの手は 六さいよりも 大きいよ
手足をね くらべてみると 大きいな
手がすこし紙からはみ出る 大きいな
今の自分 〇さいの手がたはみ出しちゃう
いつのまに 体と足と手 せい長だ
先生と せをくらべてみたら むねまでだ
子どものね くつとかを見て せい長
小さいころ くつが小さい すごくねー
体がね 大きくなった 手足もね
しん長が すごくぐんぐん のびたんだ
6さいと くらべてみたら 大きいよ
手足がね ぐんと大きくなってた
手と足が すごくいっぱい のびたんだ
自分の手 友だちよりも 小さいな
赤ちゃんの ことをいっぱい したんだ

いろいろね 赤ちゃんよりも 大きいよ
だんだんね 土ふすがね はなれるよ
みんなはね そだつのとては やいんだ
体がね 小さいときよりも のびたんだ
じぶんね ちっちゃかった 手と足が
1さいの 手は小さいよ びっくりだ
手と足を くらべてみたら 人それぞれ
じぶんもね 赤ちゃんのとき 小さいよ
手や足が すごく大きくなったんだ
手と足は まえよりもすごく 大きいな
せいはねえ あっというまに のびるんだ
見てみると すごくせい長 してたんだ
手足をね はかってみると でかいんだ
みんなのと 小さい足を くらべるよ
どんと 体がぐーんと のびるんだ
赤ちゃんの 手とくらべたらすごくちがう
体はね だんだんだんだん のびていく

資料1 体くらべの後に作ったかるた文

る訳を予想する活動を設定した。子どもは学習内容に大変興味を持ち、それぞれ意欲的に取り組んだ結果、泣き声の違いから心の成長を、泣く理由を予想する活動から泣き声の中の心のはたらきを理解することができた。

・自分との関係を意識する活動を設ける

成長のマップ作りの活動は、子どもが自分自身の成長に目を向け、成長の意味や役割などの理解を深めるための活動である。まず、赤ちゃん時代に比べて、自分が成長したと思うところを個々に考え、ワークシートに書かせた。その時点では足が大きくなった、頭が大きくなったなど4～5個ぐらい見つけることができた。次の拡大マップに貼っていく活動では、自分が見つけたことを付箋に書き写し「あっ 同じや」、「ちょっと違う」などつぶやきながら、同じものは重ねて、違うものは少し離すなど工夫を加えながら次々に貼っていった。その結果、拡大マップの図は付箋だらけとなり描かれた体の図が見えにくくなった(写真3)。それを見て、成長は体全体で起きていると実感することができた。また、付箋を貼っていく作業や付箋の分類作業を通して、体以外に心の成長や能力の成長もあると気づいたり、友達の考えとの共通点や相違点に気づいたりすることで新たな理解ができた(資料2)。

体くらべの学習では、体の変化を自分のことととらえさせるために追体験の場を設定した。ここでは、人型の上に寝転んでみたり、1歳から6歳までの年齢別手型や大人の手型に自分の手を重ねてみたり、赤ちゃんの靴を自分の足に当てて見たり(写真4)、赤ちゃん人形と背丈くらべをするなど自分との関係を意識して比べようとする姿が見られた。これらの様子やワークシートとあしあと(日記)の記述を通して、子どもは自分の成長を確信できたと考える。

自分との関係を意識させるために、本単元では、自分と赤ちゃんの体、自分と大人の体というように常に自分を比較活動の中心に位置づけてきた。また、自分自身の手型や足型や担任の手型足型人型を比較に使うなど、教材も自分と関係あるものを使ってきた。その結果、子どもは、自分が成長してきたことや今後も成長していく必要があるということに気づくことができた。

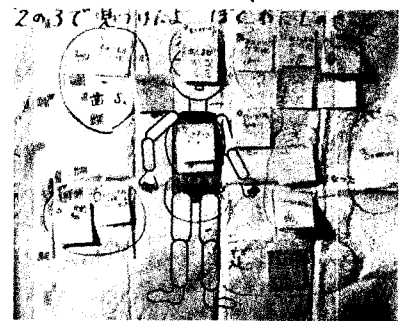


写真3 拡大マップ

A男:ほくは、せがのびるだけかなあと思ってたけど、かやいろいろあるってわかってよかったです。
B子:ともだちのをきいてみたり見ると、こんなにいっぱいばしょがせい長するんだなあと思いました。これからもっとせい長して、いろいろ大きくなればいいなあと思いました

資料2 成長マップ作りの感想



写真4 靴くらべ

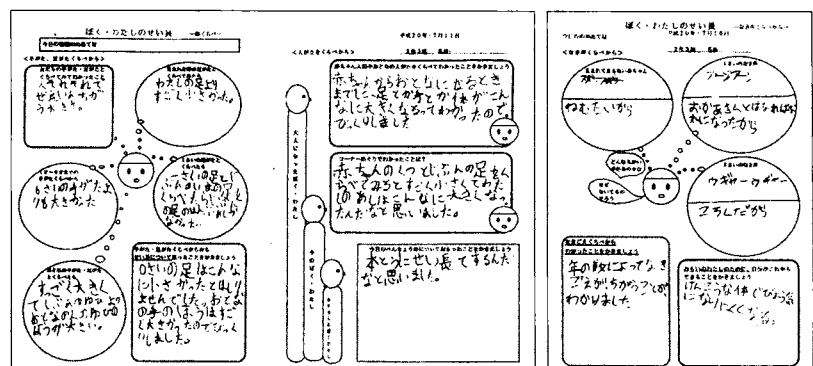
・ワークシートの活用で思考をつなぎ、一連の流れに

体の変化の実感から自分の成長の自覚へ、そして成長に必要な行動へと子どもの思考を連続させるために、「成長マップ作り」「体くらべ」「泣き声くらべ」のすべての学習において、ワークシートを使わせながら授業を進めた。それらのワークシートは学習の目的や内容に沿ったもの、自分が今何をしているかがわかるようなもの、その学習のふりかえりができるものにした。

成長マップづくりでは、自分をふり返り、成長したことを探し出してワークシートに記録していく作業によって、子どもは自分が成長していることに気づくとともに、自分の成長に関心を示すようになった。

体くらべでは、比較する活動が多いので、体験と記録を繰り返しながら授業を進めた。比較する項目が多かったにもかかわらず、子どもは目的意識を持ち、分かったこと気づいたことをすぐ書きとめながら学習を進めていった(資料3)。

泣き声くらべの活動では、三種類の泣き声の違いとそのわけを考えさせながらワークシートに書き込ませていった。子どもはそれぞれの泣き声の違いを知ろうと聞き取りに集中し、自分なりに感じ取ったことをワークシートにつきつぎに書き留めていった(資料4)。それを話し合う場では、意欲的に次々と発表する子どもの姿があった。聞き取ったことを全体に伝える場面では、「ええん」「え



資料3 体くらべワークシート 資料4 (右) 泣き声くらべワークシート

一えーん」「少し違うよ、うええんに聞こえる」などと小さな違いにもこだわり、主体的に自分なりの考えを発言した。泣く理由についての話し合いでは、事前に調べた保護者インタビューのワークシートも参考にしながら、「おなかすいたから」「さびしいから」「眠いから」などと様々な考えを意欲的に発表した。それは、保護者インタビューで自分の幼い時の泣く様子を聞いていたために、教材の泣き声を自分が幼い頃の泣き声と同一視したからではないかと考える。

このようにワークシートを記録しながら学習を進めさせたことで、成長の実感から成長の意義の気づきにそして主体的にかかわりへと、子どもの思考がつながっていった。それは、個々の3枚のワークシートの記録を見ることで十分に推察できた。

イ 「かかわり」

・交流活動を取り入れ、成長についての理解を広げる

「マップ作り」「体くらべ」「泣き声くらべ」の学習では、「よさ」の共有がよりスムーズに確実に行われるよう、グループで相談したり書いたワークシートを見せ合ったりする交流活動の場と、全体の場で自分の考えや人の考えを伝えたり聞き取ったりする交流活動の場を設けた。「マップ作り」の学習では、グループで話し合う以外に、個々が見つけたことを付箋に書いて拡大マップに貼っていく中で、友達の書いたものと比較・分類しながら意見交流ができる活動も設けた。「体くらべ」の学習では、互いの手形足型を比べ合う場と追体験の場で実際に見合ったり試したりする交流活動を取り入れた。

自分の手型・足型をグループの友達と比べ合う場では、自分の手を友達の手型に乗せてみたり、手型と手型を重ねてみたりしながら、個人差があることに気づくことができた。「マップ作り」や「体くらべ」の追体験の場では、グループで相談しながらワークシートに書き込ませた結果、互いに見合ったり伝え合ったり、ワークシートを見せ合ったりしながら自分の体の変化を実感し、成長を確信する様子が見て取れた。「泣き声くらべ」では、違いの聴き取りが容易になるように、グループで相談しながら活動させたところ、子どもは、自分が聞き取ったこと、感じたことを他に伝えようと意欲的に発言していた。すなわち、交流活動によって子どもは多くの考えに出会い、成長への理解を広げていったと考える。

ウ 実践的自覚へのデザイン

子どもが実践的自覚に至り、自分の成長に主体的に関わるには、成長しつづけることの必要性に気づく必要がある。

そこで、大人の体と比較させる活動によって、成長途上の自分を意識させることにした。子どもは、大人の体と自分の体を比較し、その差を理解したことで、自分がまだまだ成長の途中にあることを自覚し、これからも大きくなる必要があると気づくことができた。それは資料1のカルタの文章から十分にうかがい知ることができる。また、「泣き声くらべ」の学習でも、心もまた成長する必要があると感じて、さらなる成長をめざす子どもの姿があった。それは、資料5や資料6の記述から推察できる。なお、単元の最終に書いた感想文や、その日の日記には、「健康な体で病気になりにくくする」「これからはご飯を好き嫌いしないで食べる」「今は転んだら泣くけど大きくなったら転んでも泣かない」など自分の成長に主体的に関わろうとする気持ちが多く書かれていた。これらのことからこの単元での実践的自覚は可能であったと考える。こうした気持ちやこの単元で学んだことは、今後の保健学習や生活科のマイヒストリーでスキーマとしてつながるはずである。

むかし、今、みらいとながれを見ると、1さいでなっていたこととかはもうなかないけど、今ないことはみらいになっては泣いていないかもしれない。だから、みらいのじ分がなっていたら、「もっとみらいのじ分から見たら、なかなくてもいいかもよ」と教えてあげることができる。けれども、そのときそのときでなくともたいせつなことだとわたしは思った。

資料5 泣き声くらべのあとの感想文

(6) 単元を終えて

これまで述べてきたように、可視化・「かかわり」・実践的自覚へのデザインの手だてによって、本単元における「よさ」の共有はほぼできたと考える。そこで、これらの手だてが知識創造にも有効であったか否かについて、さらに考察を進める。

本単元における知識創造のためには、子どもが自分の心や体が大きく変わってきていることを実感できること、自分が確かに成長していることやこれからも成長し続ける必要性を自覚すること、そして、自分の成長に主体的に関わろうとするものの3要件が必須である。そこで、この3要件について、これまで述べてきた手だてが有効であるかを考える。

可視化のために、比較する活動、自分との関係を意識する活動、ワークシートの活用という具体的方法で実践してきた。

比較する活動では、幼いころの自分と現在の自分を比べること、現在の自分と大人になった自分を比

べること、泣き声を比べること、友達と自分を比べることなど、いろいろな比較する活動を取り入れて実践してきた。その結果、子どもに自分の心や体が大きく変わってきていることを実感させたり、自分が確かに成長していることを確信させたり、これからも成長し続ける必要性を自覚させたりすることができたので、比較する活動は本単元の知識創造に有効な手だてであったといえる。

また、自分との関係を意識させながら学習を進めたことによって、子どもが自分の成長に主体的に関わろうとする意識を高めることができた。「成長マップ作り」において自己の成長を見つける活動をしたことで、子どもは自分がいろいろ成長していることを自覚することができた。体くらべにおいては、常に自分を基点において体の変化を見つめたことで、子どもは自分に関係することとして成長の意味を理解していった。泣き声くらべでも、教材とかかわりながら自分の幼いころや自分の未来を見つめることができた。つまりこれらは、学んだことを一度自分に戻し新たな気づきに至ることを積み重ねる学習となったことで、この学びの過程は知識創造の学びそのものであったと考える。

ワークシートを使つての学習では、成長マップを基本ワークシート（拡大マップ）とし、課題をつかませる場面で活用することで思考の連続性を保つことができた。また、ワークシートに自分をふり返って記録する個所を設けた結果、子どもは、常に自分を意識しながら、成長についての理解を深めていくことができた。しかし、常にワークシートを記録しながら学習を進めることは、時間の確保という点で課題となった。

交流活動を頻繁に取り入れてきたことは、成長についての理解の広がりや具体的取り組みへの理解を促す。子どもは、友達と話し合ったり相談したりしながら、成長に対する見方・考え方を広げていき、自分の成長に主体的に関わろうとする意識を持つことができた。すなわち、交流活動もまた、知識創造に効果的に機能したといえる。

学習前には、自分の成長を意識していなかった子どもが、この学習を通して自分の心と体の変化を実感できたこと、自分が確かに成長していると自覚できたこと、成長し続ける必要性や大切さを理解できたことは、授業での子どもの姿や、書き残したものから確信することができた。

本単元では成長という抽象的で見えにくい現象を子どもが具体的に理解できるようにしたいと願って実践してきた。3時間の授業実践を終えた結果、子どもは成長という生命現象を体の変化や心の変化として実感することができた。そして、その実感をもとに、成長することの大切さを自覚し、自分の成長を連続させようとする保健意識も芽生えるに至った。

以上のことから、今回採った「よさ」の共有のための手だては、知識創造の充実に有効に機能したと考える。そして今後、ここで学んだことが保健認識となって実際の生活場面や他教科の学習につながることを願っている。

- ・健康な体で病気になりにくくなる。
- ・けがをしても泣かないこと。
- ・すぐに切れない人になりたいです。
- ・友達にやさしくしたい。
- ・これからはあまり泣かなくて人気持ちを分かるように成長していきたい。
- ・ご飯を好き嫌いしないで食べる。
- ・ご飯がほしい時は泣かずに自分で食べる。
つまり自分のことは自分でする。
- ・あんまり悪いことはしない。
- ・ぼくはころんだら今は泣いてしまうけど、大きくなったらころんでも泣かない。
- ・ぼくはあんまりなきたいです。
- ・留守番したり、自分でできることを全部自分でする。
- ・これから自分のできることは漢字の書き順がうまくなることです。
- ・ぼくはぶつかっていたくても泣いたらいけないなあと思いました。
- ・ぼくはころんで泣いていたので泣かないでおこうと思いました。
- ・体を大事にする。お母さんの言うことをきく。
- ・ぼくは泣くことをすくなくするといいな。
- ・我慢できることは我慢する。自分でできることはじぶんです。
- ・すききらいしないでたくさん食べて丈夫な体を作る。
- ・いやなことがあってもいつもニコニコ。
- ・昔、今、未来と流れを見ると1歳では泣いていたけど、今は泣かない…
- ・赤ちゃんが泣いているとき、どうすればいいかを考えてお話をしたい。
- ・悲しくても痛くても泣かないようにする。
- ・漢字を全部覚える。
- ・すぐに泣かなくなりたい。
- ・赤ちゃんの泣き声はオギャーオギャーと言っているのを初めて知り、かわいいなあと思った。
- ・あんまり泣かないで、けがもしないように頑張りたいです。
- ・これからいっぱい食べて運動する。
- ・身長が伸びるようにしたい。
- ・これからもっとお母さんのお手伝いがしたい。
- ・今まではおなかがすいても泣いたけど、未来の私は簡単に泣かないことができると思います。
- ・未来は赤ちゃんを育てること、人にやさしくする。
- ・ころんだりしても泣かないようにしたい。
- ・あまり泣かないようにする、泣かせないようにする。
- ・赤ちゃんのころよりいろいろできる。
- ・心の勉強をしたいです。

資料6 泣き方くらべのあとの感想